

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

東京科学大学(理工学系)

前期日程

科目

英語

総括

試験時間	90 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	150 点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

前身である東京工業大学の英語の入試では、2題合わせた本文の総語数が22年度に3,400語弱、23年度に3,500語強と過去最多を更新し続けた後、24年度には3,000語強と減少、東京科学大学となった昨25年度は3,300語強と増加、本年度もほぼ同じ3,300語強と推移してきた(いずれも空所に入る選択肢や和文英訳部分を含めず)。この間の記述式問題の題数は、一貫して英文和訳が4題、和文英訳が2題、日本語による内容説明も2題となっている。本年度の記述量は全体としては例年並みと言える(和訳問題の元となる英文総語数は75→93→98→90→104、英訳問題の元となる和文の総字数は99→106→85→103→126、内容説明の制限字数の合計は150以内→130以内→150以内→155以内→105以内と推移)。選択式問題は昨年度と異なりあまり迷わされる問いが含まれていなかったのに加え、Ⅱで「本文の内容に関する問に対する答の選択」が姿を消し、さらにここ3年は2/8、その前の21年度は2/9の選択であったⅡの「内容一致」が本年度は2/7となった分、受験者の負担はかなり減少したように思われる。昨年度ほどではないにせよ大学受験生にとって馴染みが薄いと思われる語彙がまま見られたが、それによって文章の理解がさほど妨げられることはなく、全体的に昨年度と比べ易化したとの印象を受ける。

〈特記事項・トピックス〉

従来通りの長大な論説文2つによる出題であった。いずれも上記のように語彙的にはそれなりにレベルが高いが、内容的には理解し易いものであった。内容説明問題に関しては、東工大時代から制限字数が厳し過ぎるような出題もまま見られたが、本年度は昨年度に続き2題とも適切な字数が与えられていた。

〈合格への学習対策〉

東京工業大学と東京医科歯科大学が一昨年10月に統合されてできた新生・東京科学大学であるが、統合直後は元の「両大学と『同等の入試』を実施する」と表明されていた通り、英文量や個別の設問形式は「東工大様式」とでもいうものをそのまま引き継いでいる。したがって、基本的な入試対策としては従来通りに読解や作文についての地道な学力の向上に努めることに尽きるだろう。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	記述・選択	「科学研究における偏向」 下線部内容説明(日本語・1題) 英文和訳(2題) 和文英訳(1題)	解答に関わる箇所が下線部と相当に離れている点(両者の間に660語ほどの記述と2つの空所が置かれている)に関しては、東工大時代の出題を考慮に入れても際立っていたが、落ち着いて読み進めれば決して見つけ難いものではなかったはずである。さらに、この馬に関するエピソードは相当に有名であり、かなり多くの受験者にとって既知のものであったと思われる点からも対処し易かったものと推察される。 全体としては例年並みの平易な出題だが、「椅子に深く座ってもたれかかる→悠然と構える」といった比喩的な意味でのsit backと、辞書に載っている第一義ではない「…に対処する[取り組む]」というcontend with...の訳出に苦労した受験者は多かっただろう。 従来の傾向に沿った、与えられた日本語を素直に英語に置き換えることで得点できる平易な出題と言える。	やや易

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

		空所補充1文選択（5箇所） 本文の内容に関する問に対する答の選択（2題） 内容一致（3／10題）	空所 A に入れるべき文が最も選び辛かったと思うが、他の4つに入れるべき文が比較的楽に選べた後で「残った1が入れられそう」と判断した受験者が多かったのではなかろうか。 不正解の選択肢の内容がいずれも明らかに「外れ」とわかり易いので、取りこぼしは少なかったものと思われる。 6の growth spurters, 10の survivor bias は、一般化している表現とは言えないが本文中にそのまま用いられているので、その周囲をしっかりと読み込むことで選べることを期待できたように思われる。	
II	記述・選択	「都市における移動法」 下線部内容説明（日本語・1題） 英文和訳（2題） 和文英訳（1題） 空所補充1文選択（5箇所） 内容一致（2／7題）	I－1. と異なり、解答に用いるべき箇所が下線部に近く、制限字数も少なめの小規模での出題であったため、得点し易い問題であっただろう。 Iの2題と比べて、より平易で迷わされる要素が少なかっただろうと思われる。 与えられた日本語の中で「自動的に」という表現はあまり自然であると感じさせない、いくらか座りの悪いものであり、この文脈でいかなる意味で用いられているのだろうか、と訝しく思った向きもあったかと思うが、この大学の英訳問題ではその辺りに関していわゆる「和文和訳」的な工夫を求めている場合はほとんどないものと考えて良く、素直に automatically と訳しておけば問題なかっただろう。 I－5. と比べても、それぞれの空所に入れるのに最適な選択肢がより明白であったと思われる。 こちらも I－7. 以上に不正解の選択肢の「外れ」感が明白で、迷いなく正解を選べるようになっていた。	易

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。

出典・資料

Camilla Pang, *Breakthrough: How to Think Like a Scientist, Learn How to Fail and Embrace the Unknown*.
 Charles Montgomery, *Happy City: Transforming Our Lives Through Urban Design*.